

教員養成課程における箏のオンデマンド授業

—唱歌の学習効果に着目して—

伊 藤 真

(広島大学大学院人間社会科学研究科)

On-demand *Koto* Course on Music Teacher Training: Focusing on Singing Mimicry of Instrumental Music

Shin ITO

Abstract

During the COVID-19 pandemic, most of the university-level practical music courses were changed from in-person to on-demand classes. Subsequently, there is a need to determine the following: whether these on-demand classes achieve the course goal; how students adapted to these classes; and, whether there was any positive impact of this changed mode of instruction. Therefore, this study aims to clarify the positive impact of the on-demand *Koto* course on music teacher training; as part of this course, students watched a set of lecture videos that instructed how to mimic instrumental music via singing (*shōga*) and learned *Koto* without playing the instrument. The questionnaire completed by students after the completion of the on-demand course in 2020 was analyzed, and compared with the description of the experience of the in-person course in 2019 by another group of students; the data of the 2019 course were obtained by conducting another questionnaire survey. The results showed that the level of achievement was higher in the on-demand course than that in the in-person course for acquiring knowledge of basic *Koto* technique, grasping the musical structure, acquiring realizations about musical expression and advanced *Koto* technique used, and grasping how to interpret the music. The findings show a positive impact of singing mimicry of instrumental music on learning *Koto*: (a) students could focus on the music by avoiding the difficulty of instrument operation; (b) students could have an overview of musical structure; (c) students could understand tone pitch, musical phrase, techniques, and musical structure simultaneously, which cannot be acquired by singing Do-Re-Mi or La-La-La. Additionally, in the on-demand model, students watching lecture videos repeatedly as needed advanced the abovementioned positive impact of singing mimicry of instrumental music.

1 はじめに

(1) 教育現場と大学における伝統音楽学習

学校教育において日本の伝統音楽の扱いが重要視されて久しい。小学校、中学校、高等学校の教育現場では、多くの教師が多様なアイデアと努力によって伝統音楽の学習を進めている¹⁾。教科書の学習資料や指導資料、ウェブ動画資料も充実し²⁾、さらに授業実践の支えとなる質の高い出版物や教材も身近に入手できるようになった³⁾。いずれも丁寧にかつ工夫を凝らして作られていて、教師自身の学習にも授業実践にも大いに役に立つものである。また、近年のグローバル化や海外での日本文化の積極的受容(斎藤 & リンデル, 2015; 寺内, 2015)も相まって、伝統音楽を学習する重要性は増し、「日本の音楽」の存在感は高まっている。このような状況も、ますます教育現場において伝統音楽の学習を促進する要因となっている。

大学の教員養成課程においても、求められる内容と学習者・指導者の状況に応じた多様な取り組みが行われている。大学の教員養成課程では、音楽の専門的学習として、演奏家をはじめとする専門家から各種伝統芸能を学ぶ授業や機会がある。学生のほとんどは西洋音楽を学習経験の中心にもっており、大学も西洋音楽をカリキュラムの中心に据えることが多い。そのような状況において、伝統音楽に関する知識・技能、そして授業実践力を網羅的に獲得させるのは容易なことではない。大学では、教員養成の立場からは、授業実践力の育成を目指した、教科の指導法に特化した授業を展開することも方法のひとつではある。専門的な技量は高くないが小・中・高の授業レベルで授業づくりを指導することが得意な、現職経験のある大学教員が「各教科の指導法」を担当する場合がこれに該当する。一方で、アカデミックな立場から、各種伝統芸能の専門的内容を追究する姿勢も必要であろう。日本音楽を専門とする音楽学の大学教員や演奏家のバックグラウンドをもつ実技系教員が「教科に関する専門的事項」の講義や演習を担当する場合がこれに該当する。ここで重要なことは、どちらか一方が学ばれるのではなく、各教科の指導法と教科に関する専門的事項を相互に関連付けながらバランスよく学ばれるのがよいということである。また、たとえどちらか一方であっても、もう片方のことを意識しながら講義や演習が展開されることが望ましい。

では、大学の教員養成課程では具体的にどのように伝統音楽が教授されているのだろうか。伊藤・平山(2017)は、教員養成課程における箏の演習の取り組みについて、学生の自己評価を基に学習成果と指導の改善を報告している。学生は演習をとおして箏の取り扱い方や準備の仕方、演奏に関わる基本事項を理解したり、演奏実践をとおして箏の多様な音色を感覚的に捉えたりするなどの成果があった一方で、箏の各技法の理解を曲の演奏実践に結びつけることや、現代曲やアンサンブルなど学生が興味関心をもてる作品を教材として取り上げつつ、古典曲の魅力や重要性を感じ取り、馴染みのある音楽にしていくことなどを課題として挙げている。小塩・大学(2019)は、教員養成大学での箏・三味線の指導について分析している。そのなかで、通常のお稽古とは異なり、教員養成大学の授業の目的を「和楽器とその楽器のために作られた楽曲に興味をもってもらうこと」(p.219)であると述べている。大井・伊藤(2017)は、中国地方5県の国立大学教員養成課程の伝統音楽に関する授業の状況を調査したうえで、伝統音楽への関心を喚起・向上させること(文化性の理解)と、実践的指導が可能な技術の熟達をめざすことの両側面が必要であることを指摘している。大学での教育が学校教育実践に直結する内容であれ、伝統音楽の各種目の専門性を高める内容であれ、学生が伝統音楽への意識を高め、将来教職に就いた際に自立して学び続けるための動機づけを行うことが、教員養成課程に求められる基盤となる共通課題であるといえよう。

(2) コロナ禍における教員養成課程の授業

このような伝統音楽に関する教員養成課程レベルでの取り組みは、コロナ禍のなかで形態を変える必要性に迫られた。従来の目的を達成するために、どのように状況に応じた授業形態の変化が経験されたのか、またそれがポジティブな効果を生むのかどうか議論の余地がある。コロナ禍の授業全般に共通することは、対面による教授を回避し、オンラインで授業を展開することであった。知識の伝達を主とする学問領域や学習内容であれば大きな問題はないが、技術の伝達や実践活動を伴う領域であれば学習効果は減少してしまう。特に、学習者に馴染みのない伝統音楽のように、新たな知識の獲得と実践活動の両方をまたぐ(往還する)必要のある学習内容の場合は、それが将来教職に就いたときの授業実践の土台となることを考えると、かなりの工夫が求められる。ここで重要になるのが「唱歌(口唱歌)」である。これは伝統楽器を習得する際に、旋律やフレーズを特定のシラブルによって唱え歌うことによって学ぶ手法である。楽器を直接触らなくても、唱歌によって擬似的に楽器演奏を体感することができる。この唱歌を用いた大学のオンライン授業実践をいち早く報告したのが尾見(2021)であった。尾見は、箏・和太鼓・江戸祭囃子・雅楽の4種目を総合的に学習する授業を構成し、コロナ禍で対面授業が困難となった状況において、オンライン授業と唱歌の特性をうまく活用した実践を行っている。尾見はこの実践を通して、①唱歌による演奏体験が当該音楽様式の興味と理解の橋渡しとなることや、②「唱歌」の体験が音楽の主體的な聴き方を促し、それまで馴染みがなかった日本の伝統音楽に対する興味と理解をもたらすことを指摘している。

(3) 本稿の目的

本稿では、コロナ禍がもたらした非対面型授業のなかで、楽器の操作を伴うことなく講義動画を視聴し

ながら唱歌で演習を行う箏のオンデマンド授業を実践し、その学習効果を明らかにすることを目的とする。まず、広島大学教育学部音楽文化系コースで2020年度に開講された箏の演習の授業（学部3年生対象）の概要を示し、授業後の振り返りシートの記述を基に、学生がオンデマンド授業をとおして何をどの程度学んだのかを検証する。その際に、2019年度の対面授業との比較を行う。ここから、大学での教育、学校現場での授業実践、そして音楽教師の自己研修それぞれに対して有益な示唆を得たい。

2 唱歌を用いたオンデマンド授業の概要

対面で行っていた2019年度までの本授業の内容は、実際に楽器に触りながら、箏の取り扱い、調弦、基本的奏法、簡単な箏曲の演奏、《六段の調》の演奏を学ぶもので、主に箏の技術習得が目的であった。2020年度のオンデマンド授業では内容と方法を変更し、①箏と箏曲の歴史、箏の取り扱い、調弦、様々な奏法を説明した講義動画を視聴すること、②時代や編成の異なる様々な箏の作品を動画視聴によって鑑賞すること、③《六段の調》の各段をさらに短いフレーズに区切って、奏法やフレーズ、音楽的特徴の分析的解説、模範演奏、唱歌による歌唱（または弾き歌い）を含む講義動画を視聴しながら、実際に唱歌を歌って練習すること、の大きく3点で構成した。この授業の目的は、《六段の調》を「唱歌」で歌い、曲全体の構造を知ること、曲に含まれる箏の技法を知ること、唱歌の役割を体験的に知ること、に設定した。授業全体の構成を表1に整理して示す。

ここで、「唱歌」を中心に本授業を構成した理由は、コロナ禍で楽器が触れない状況への対応だけではない。箏の習得過程において、特に西洋音楽を中心に学んできた音楽専攻学生は、記譜された音符をそのまま「読もう」とし、その結果、楽譜上に示される音の平面的羅列をそのまま音現象として捉えてしまう傾向が強く、このことが箏の学習を阻害していることが多い。授業で用いる箏の楽譜は縦書きで糸番号が漢字（漢数字）で示され、音を変化させたり装飾音をつけたりする記号が併記されている。これは五線譜とは異なり絶対的な音高を示さないもので、発音する弦とそのタイミングが示された、いわゆるタブラチュア譜のようなものである。もし、これをドレミの絶対音高によって五線譜で示したならば、学生たちは目で見て歌えることに安心するだろうが、そこから生まれる音楽は平面的で、もはや箏の（古典の）音楽にはならないし、西洋音楽の延長線上にしか箏の音楽を捉えないだろう。仮に五線譜に書き直すとしても、どの音がいつまで響いているのか、どの音とどの音が混じり合っているのか、どの音がどこで消えるのか、といったことが複層的に示されなければならいだろう。しかし、実際の演奏は記譜されたものからは少なからず揺れ動き、改めて楽譜は演奏上のメモ書きであるということに気がつく。楽譜にドレミが書かれていないことは、確かに五線譜に馴染んだ学生たちには不便かもしれないが、「伝統音楽の世界ではこのような楽譜と唱歌を用いることは五線譜で示されないことをも音楽として表現できるという意味において極めて有効である」（伊藤, 2021, p.10）ことを、実践をとおして体感してほしいという願いがあった。

雑誌『邦楽ジャーナル』に連載された箏曲演奏家の木田敦子による「『六段』を弾き“うたい”しよう」（2019年8月号～2020年7月号）は、「六段の調」全編を唱歌で歌う提案をしているのだが、そのなかで「楽譜を目で追いながら弾くのではなく、楽曲を理解した上で弾きたい…（中略）…歌えないものは弾けない」（2020年6月号, p.23）と述べており、演奏以前に歌うことがあるという木田の考えに共感を覚える。また木田は、楽譜による演奏は、時に耳を使うことを怠り、肝心の音楽性を後回しにしてしまうおそれがあること、唱歌には、音程、リズム、和音、手法、音のニュアンスが理解できる（鼻歌やラララではだめ）ことを述べている（2019年8月号, p.31）。つまり、唱歌による学習をとおして、音楽的な演奏を導くことが必要だと言っている。このことはもちろん、唱歌を用いない西洋音楽の学習にも当てはまることである。唱歌をもつ音楽であれば、なおさらこのことが必要であると解釈するのがよい。

3 振り返りシートの記述内容の分析

（1）質問項目

学生は授業後に学習の振り返りシートを記入し、アップロード提出した。質問項目は、楽器、奏法、楽譜の理解がどの程度進んだかを尋ねた「箏の基本的事項」に関する4項目（カテゴリーA）、《六段の調》

の音楽的内容の理解や演奏技術の獲得がどの程度進んだかを尋ねた「《六段の調》」に関する4項目(カテゴリーB)、指導法や教材解釈の理解がどの程度進んだかを尋ねた「箏の指導法」に関する2項目(カテゴリーC)、箏の興味関心の高まりや継続的な学習の意欲について尋ねた「箏への興味関心」に関する2項目(カテゴリーD)の計12項目であった(表2)。これらは「とてもできた」「ややできた」「あまりできなかった」「ほとんどできなかった」の4件法で自己評価させた。また、この12項目とは別に、学習の成果と課題について自由記述させた。

表1 箏の授業構成

| | 対面授業(2019年度) 楽器を弾いて学ぶ | オンデマンド授業(2020年度) 唱歌を歌って学ぶ |
|------|--|---|
| 第1回 | <ul style="list-style-type: none"> ・楽器の取り扱い方 持ち運び、立奏台の準備、楽器の配置、箏柱の扱い方、調弦 ・基本的な奏法 親指、中指と人差し指、合わせ爪、オクターブ、かき手、わり爪 | 4つの動画 <ul style="list-style-type: none"> ・唱歌で学ぶことの意味について ・箏の歴史 ・楽器について ・近世邦楽について(《六段の調》《千鳥の曲》の鑑賞) |
| 第2回 | <ul style="list-style-type: none"> ・《さくらさくら》の旋律、前奏、後奏 ・《さくらさくら》の変奏 オクターブ、左手のピチカート、スクイ爪等 | |
| 第3回 | <ul style="list-style-type: none"> ・《六段の調》初段(1) | ※適宜、小曲や簡単な二重奏曲を併用 <ul style="list-style-type: none"> ・《六段の調》初段(6つの動画) 1行目~2行目2小節目/2行目3小節目~3行目2小節目/1行目~3行目2小節目を通して/3行目3小節目~5行目1小節目/5行目2小節目~7行目/初段を通して ・楽器製造の動画視聴 ・《六段の調》二段(8つの動画) 曲の構成と楽譜について/二段の演奏/1行目/2行目/3~4行目/5行目1小節目~7行目/二段を通して/初段と二段を通して ・吉崎克彦《PRIZM》の鑑賞 ・《六段の調》三段(7つの動画) 三段の演奏/1行目/2行目/3行目~5行目2小節目/5行目2小節目~7行目/三段を通して/二段と三段を通して ・八橋検校《みだれ》の鑑賞 ・《六段の調》四段(8つの動画) 四段の演奏/1~2行目/3行目/3行目~6行目/6行目1小節目~7行目/3行目~7行目をまとめて/四段を通して/三段と四段を通して ・宮城道雄《越天楽変奏曲》の鑑賞 ・《六段の調》五段(7つの動画) 五段の演奏/1行目~3行目2小節目/3行目3小節目~5行目/5行目4小節目~7行目/4行目4小節目~7行目をまとめて/五段を通して/四段と五段を通して ・宮城道雄《ロンドンの夜の雨》の鑑賞 ・《六段の調》六段(8つの動画) 六段の演奏/1行目~2行目2小節目/2行目2小節目~3行目2小節目/3行目2小節目~4行目3小節目/4行目3小節目~5行目2小節目/5行目3小節目~7行目/六段を通して/五段と六段を通して ・沢井忠夫《讃歌》の鑑賞 ・《六段の調》まとめ(5つの動画) 初段から最後までゆっくりのテンポを通して/右手の奏法について/《六段の調》を演奏者のアングルで/《六段の調》を双調で/授業の振り返りと今後の課題について |
| 第4回 | <ul style="list-style-type: none"> ・《六段の調》初段(2) | |
| 第5回 | <ul style="list-style-type: none"> ・《六段の調》二段(1) | |
| 第6回 | <ul style="list-style-type: none"> ・《六段の調》二段(2) | |
| 第7回 | <ul style="list-style-type: none"> ・《六段の調》三段(1) | |
| 第8回 | <ul style="list-style-type: none"> ・《六段の調》三段(2) | |
| 第9回 | <ul style="list-style-type: none"> ・《六段の調》四段(1) | |
| 第10回 | <ul style="list-style-type: none"> ・《六段の調》四段(2) | |
| 第11回 | <ul style="list-style-type: none"> ・《六段の調》五段(1) | |
| 第12回 | <ul style="list-style-type: none"> ・《六段の調》五段(2) | |
| 第13回 | <ul style="list-style-type: none"> ・《六段の調》六段(1) | |
| 第14回 | <ul style="list-style-type: none"> ・《六段の調》六段(2) | |
| 第15回 | <ul style="list-style-type: none"> ・《六段の調》の全体を通して演奏 | |
| 第16回 | | |

※《六段の調》の楽譜は、宮城道雄著(邦楽社)を使用した。

※オンデマンド授業を行った2020年はターム制(4学期制)の採用により、週に1度、1コマ90分の授業を2回連続して行い、8週間で完結する授業形態であった。

表2 振り返りシートの質問項目

| カテゴリー | 項目 |
|---------------|---|
| A 箏の基本的事項について | ①箏の取り扱い ②箏柱の扱い・調弦の仕方 ③基本的奏法の知識 ④読譜の理解 |
| B 《六段の調》について | ⑤音楽的構造や特徴の理解 ⑥音楽的表現や技法の気づき ⑦楽譜を見ながら演奏／唱歌 ⑧曲を通して演奏／唱歌 |
| C 指導法について | ⑨箏の指導法の理解 ⑩教材解釈の方法の理解 |
| D 興味関心について | ⑪箏の興味関心の高まり ⑫学習の継続意欲 |
| 自由記述 | 学習の成果と課題 |

(2) カテゴリーA~Dの結果と考察

2019年度に行った対面授業(26名)と2020年度に行ったオンデマンド授業(22名)の振り返りシートの記述内容を比較しながら、学生の学びの成果と課題について検証を行う。

A 箏の基本的事項について

結果を図1に示す。①箏の取り扱い(持ち運び、楽器の置き方)を体得/理解できたか、②箏柱の扱い・調弦の方法を体得/理解できたか、④箏の楽譜の読み方を理解できたかは、対面のほうが「とてもできた」と感じる割合が高かった。これらはいずれも、実際に楽器に触ったり、指導者と学習者が実際にやりとりをしたりしながら会得していくことがらである。読譜の理解についても、記譜されたことを楽器の操作に移す作業があれば、さらに楽譜の理解は進むものと思われる。一方、③箏の基本的奏法に関する知識を獲得できたかは、オンデマンドのほうが「とてもできた」と感じる割合が高かった。オンデマンド授業では、学生が自分の理解度に応じて講義動画を自由に繰り返し再生したり、一時停止したりして視聴できる。指導者の手元のクローズアップを見たり、画面に提示される楽譜や字幕解説などを見たりして学習を進めることができるといった動画視聴の特性がプラスに働き、基本的奏法の知識理解を促進したと思われる。

B 《六段の調》について

結果を図2に示す。⑤音楽的構造や特徴が理解できたか、⑥音楽的表現や技法に気づくことができたか、⑦箏の楽譜を見ながら演奏/唱歌できたかは、オンデマンドのほうが「とてもできた」と感じる割合が高かった。講義動画は、1つが長くても10分程度にして、学生の負担軽減に努めた。例えば、初段(楽譜で

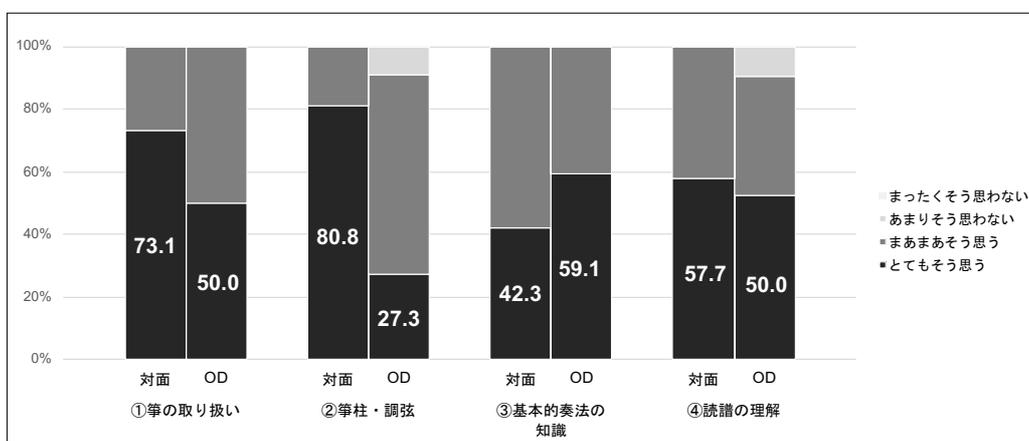


図1 A「箏の基本的事項」の結果

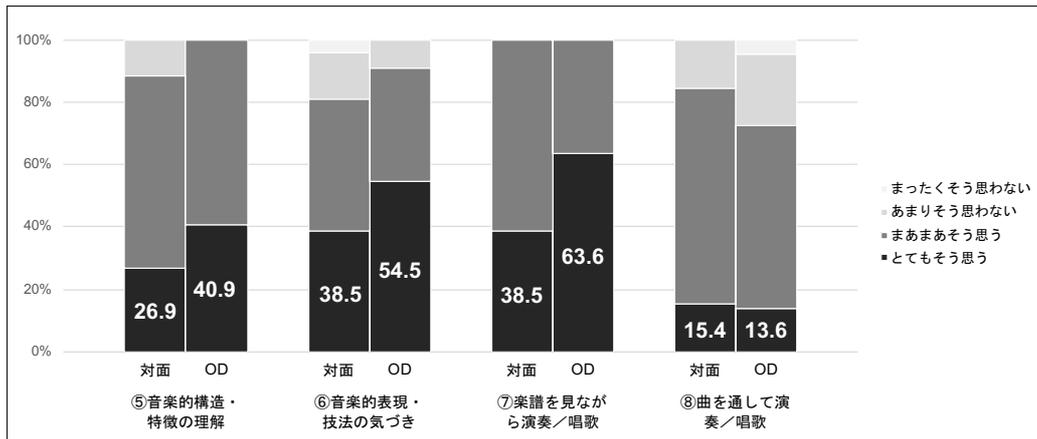


図2 B「《六段の調》」の結果

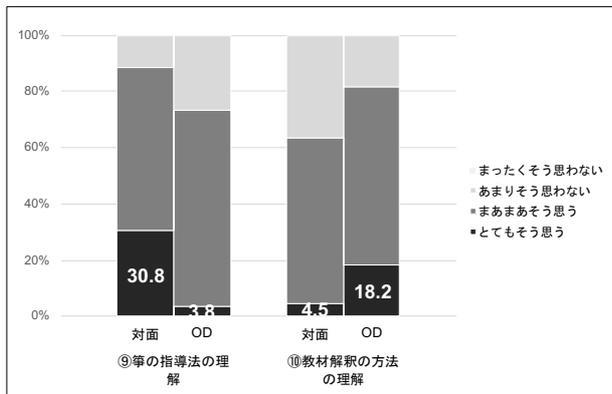


図3 C「指導法」の結果

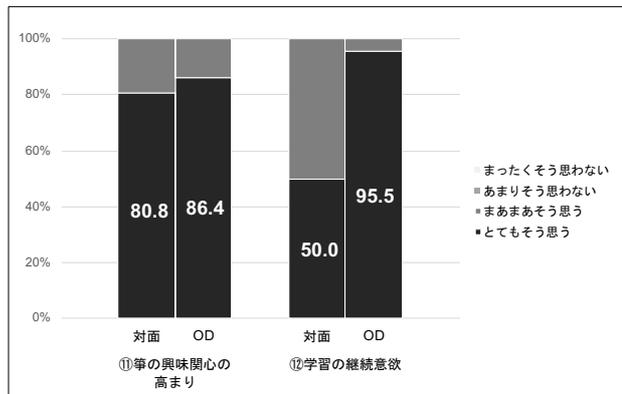


図4 D「興味関心」の結果

は1ページ分)を4つの部分に分割して動画を作成し、各フレーズに使われている奏法や音楽的特徴、演奏者がどのように表現を工夫しているかなどについて詳しい説明を加えた。学生はこれらを理論的に理解したうえで、唱歌で歌うこととなった。このような方法で初段から六段まで学習を積み上げることによって、教材曲の音楽的構造の理解や表現・技法の気づきへとつながったと思われる。また、実際の楽器演奏において楽譜と手元(糸)の両方に視線を落としながら演奏する作業は、箏という楽器の特性から困難がつかまとう。唱歌による学習は、楽器の操作にエネルギーを消耗することから解放されるため、楽譜を見ながら歌うことが比較的容易であったと思われる。

⑧曲を通して演奏/唱歌できたかは、対面とオンデマンドのどちらも「とてもできた」の割合は15%前後にとどまった。

C 指導法について

結果を図3に示す。⑨授業を通して箏の指導法が理解できたかは、対面のほうが「とてもできた」の割合が高く(30.8%)、オンデマンドとの差も27ポイントと大きかった。楽器に触れず唱歌でのみ学んだとしても、その経験からどのように教えるかは学べたはずである。学生は演奏経験がなければ教えることは難しいという意識が強いことがうかがえる。この根底には、音楽の授業で箏を扱うということは楽器を演奏することであるという考えもあるだろう。とはいえ、中学校学習指導要領(内容の取り扱いと指導上の配慮事項)には「表現活動を通して、生徒が我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わい、愛着をもつことができるよう工夫すること」と表記があるように、実際の演奏活動へのこだわりはあるべきであるし、演奏活動から学ぶことは多い。

⑩授業を通して箏の教材解釈の方法について理解できたかは、全体的に達成度は低いが、「とてもできた」の割合は対面が4.5%であったのに対し、オンデマンドは18.2%と割合が高かった。講義動画をとおして曲のフレーズ感や古典曲に特有な変拍子的な拍子感、跳躍などを「耳で聞いて」「歌って確かめ」ながら、伝統音楽のもつ芸術的側面に目を向けることができたことが要因ではないかと考える。換言すれば、《六段

の調)のような箏の古典曲であっても、西洋音楽と同様に楽曲分析ができるということに気がついたということである。このように楽曲を理解することは、作品への愛着を形成し、指導法の吟味につながる。

D 興味関心について

結果を図4に示す。①授業を通して箏への興味関心が高まったかは、対面とオンデマンドのどちらも80%程度が「とてもそうだ」と回答した。楽器に触らなくてもほとんどの学生の興味関心が高まったことは、唱歌によるオンデマンド授業の効果を示すものといえる。

②今後も箏の学習を継続したいかは、対面で50%、オンデマンドで95.5%が「とてもしたい」と回答した。オンデマンド授業の受講者は特に、獲得した知識や音楽的理解を実際の楽器演奏で体験的に確認したいという欲求が強く膨らんだと思われる。

(3) 自由記述の結果と考察

続いて、学習の成果と課題について、自由記述の結果を検討する。記述内容をキーワードで分類・整理し、記述数の多かった上位5項目を示した。()内は記述された件数を示す。

学習の成果について

まず、唱歌によるオンデマンド授業の学習の成果としては、対面よりも「奏法の理解」や「曲想の理解」に関する記述が多く目立った(図5)。以下は【奏法の理解】に整理された学生の記述である。このなかの「鑑賞の見方が広がった」という記述について、小塩・大学(2019)は「楽器の演奏経験は、鑑賞を行う時の音楽の聞き方に大きく影響を与える」(p.227)と述べているが、楽器ではなく唱歌を用いた場合でもそれが当てはまることを示唆している。また、先述した尾見(2021)の「唱歌の体験が音楽の主體的な聴き方を促す」という指摘とも一致する。唱歌の体験は、実際の楽器の操作と同様に作品を自ら音として現実化するプロセスを生み出し、作品の構造や微細な音楽的ニュアンスを感じ取ることを可能にするということである。唱歌による擬似的な演奏経験は作品を鑑賞する際の「聴き方の基準」を獲得することにもつながる。

【奏法の理解】 音と奏法を結びつけながら理解することができたので、さまざまな曲を鑑賞する際に、学習した奏法が出てきたときに鑑賞の見方が広がった。

また、【曲想の理解】には以下のような記述があった。「楽曲の雰囲気を感じ取る」ことや「曲を覚える」ことは、その作品を自分のものにするということであろうし、繰り返し練習することによって「演奏のイメージ」を喚起させることにつながる。先述した箏曲演奏家の木田敦子が述べるように、唱歌による学習を通して音楽的な演奏を導くことの準備態勢が整いつつある状況がみてとれる。

【曲想の理解】 唱歌を歌うことによって、楽曲の雰囲気を感じ取ったり、曲を覚えたりすることができた。練習する中で唱歌に慣れてきて、音の並びを把握するだけではなく、自分が実際に弾くときのイメージが持てるようになった。

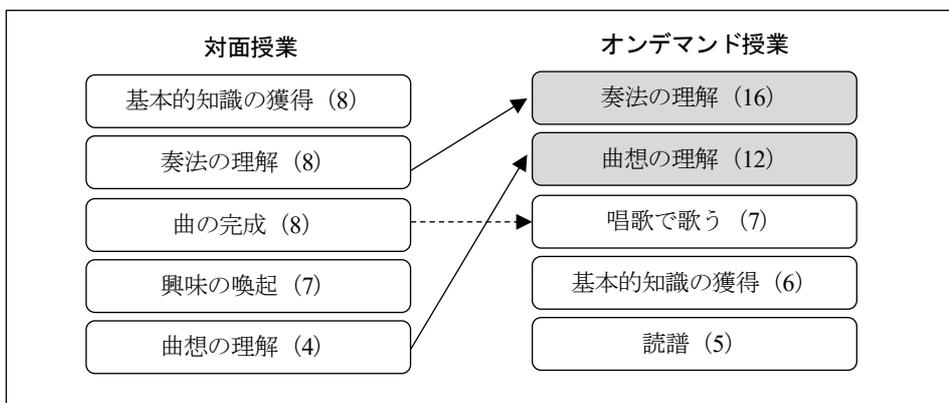


図5 学習の成果についての自由記述の結果

学習の課題について

同様に、唱歌によるオンデマンド授業の学習の課題を整理したところ（図6）、上位4項目は対面授業とオンデマンド授業で変わらず、授業方法が異なっても共通した学習の課題を認識していることが浮かび上がった。以下はそのうち上位3項目に整理された学生の記述である。【演奏技術の獲得】に関する課題は、対面授業では楽器の操作を行っているものの、満足できる水準に達していないのに対して、オンデマンド授業では楽器の操作ができなかったがゆえの学習欲求の現れである。【スムーズな唱歌】に関する課題は、唱歌という学習方法に対する習熟に起因するものである。どのような唱歌のシラブル（ことば）を歌えばよいのかにこだわりが強いと、楽譜に示されたシラブル（ことば）を正確に歌わなければならないという意識が強くなり、本来目指すべき「曲の雰囲気やフレーズ感を感じ取る」ことが達成されなくなってしまう。この課題に対しては、楽器の操作と唱歌がセットでなされる（あるいはそれらを行き来する）ことが必要であろう。【読譜】に関する課題については、経験が浅いことに尽きるが、多くの情報が記された楽譜を見ながら歌うことが難しいことを一歩進めれば、そのような音楽を箏の縦譜ではこのように記譜するのだということを理解することにつながる。

| |
|---|
| 【演奏技術の獲得】 楽器に触れて理解していないので、実際に触れながら演奏方法などの確認をしたい。 |
| 【スムーズな唱歌】 唱歌を歌うときに拍やシラブルを意識しすぎて、曲の流れに乗れないところが課題だと感じた。 |
| 【読譜】 楽譜に細かな技法の指示がたくさんあり、歌いながらその指示を見逃さないようにすることが難しかった。 |

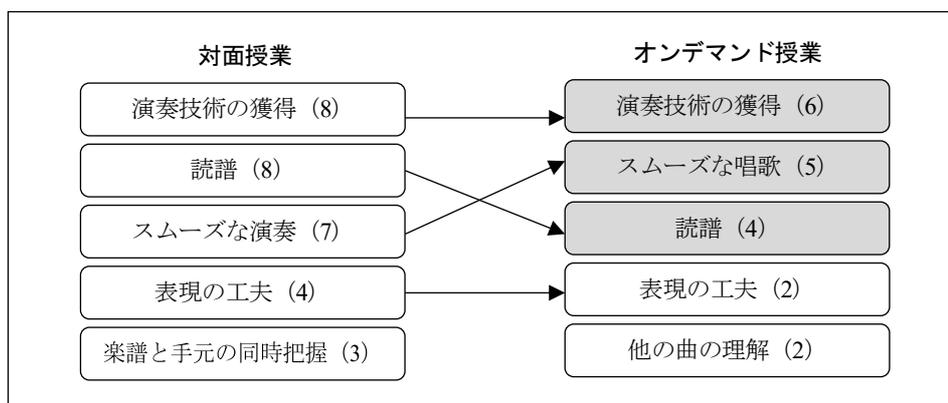


図6 学習の課題についての自由記述の結果

4 オンデマンド授業による唱歌で歌う学習の効果

以上のことから、楽器の操作をせずに唱歌で歌う学習を行った場合、その効果は次の点に整理される。第1に、楽器の操作の困難さを回避し、作品とじっくり向き合うことができることである。第2に、曲の流れ（フレーズ感や曲全体の構造）を頭に入れることができることである。第3に、ドレミやラララで歌うことではなし得ない、音程、フレーズ、手法、構造を同時に把握・理解することができることである。これらをとおして、楽器の演奏へスムーズに橋渡しすることができるものと思われる。また、たとえ楽器の演奏に至らなくても、演奏をイメージしながら箏曲のもつ音楽性を感じ取ることができる点に、唱歌を歌って学習する意義が認められる。

このような唱歌で歌う学習の効果は、対面授業かオンデマンド授業かに関わらず、どのような授業形態でも期待できるものである。本稿ではコロナ禍での授業実践という状況もあり、講義動画を視聴するオンデマンド授業の形態を採用したが、対面ではないことのよさが結果として唱歌で歌う学習の効果を高めた

可能性がある。音楽学習（練習）では、曲の一部や要素を取り出して繰り返し練習する「分習法」と、曲全体を通して練習する「全習法」を適宜組み合わせることが多い。特に、自分の不得意な部分や要素を何度も繰り返して練習する分習法において、該当箇所の動画を繰り返し視聴しながら取り組めるオンデマンド授業は効果が大きかった。さらに普段取り組んでいる西洋音楽とは異なる伝統音楽（しかも古典曲）であるから、なおさら分習法の必要性が高かった。このような部分的な練習を重ねつつ、ひとつの段や連続するふたつの段を通して練習したり、初段から六段までのすべてを通して練習したりする全習法に進む授業構成にしたことも学習の効果に肯定的な影響を与えたと思われる。

これらの学習の効果に対して、デメリットも明らかとなった。オンデマンド授業によって楽器の操作を伴わない以上、技能の習得は望めない。したがって、もし技能の習得を望むなら、実際に楽器に触ったり見たりする経験がオンデマンド授業に付帯して保障される必要がある。また、音高を示さない箏の楽譜を用いた場合、曲を知らなければ楽譜を見ただけですぐに唱歌で歌うのは難しいため、「耳からの習得」（＝聴いて真似して歌う＋補助として楽譜を使う）が伴うことが前提となる。音楽専攻学生はどうしても音高やリズムが示された楽譜がないと不安になる。楽譜はあくまで楽譜であり、鳴り響く音や音楽を記録する媒体のひとつであるという認識を新たにし、耳を使った練習の可能性にも気づくことが必要かもしれない。

5 おわりに 唱歌を中心とした学習がもたらすもの

最後に、本稿で検証した唱歌による学習は、大学教育、学校教育実践、音楽教師の自己研修にどのような示唆を与えるのだろうか。大学での教育については、五線譜システムや西洋音楽で訓練された学生にとって、歌うことで記憶に残りやすくなる。唱歌で曲を歌うことに慣れないうちはとまどいや混乱が生じ、一見すると遠回りのように思えるが、実は近道の学習方法である。また、西洋音楽にはない音楽的な気づきを与えてくれたり、その後楽器を演奏する際に有用な基礎と動機を与えてくれたりする。学校での教育実践については、児童生徒が箏の雰囲気や模倣的に体験し、楽器がうまく弾けなくても音楽のよさを捉えることを可能にする。音楽教師については、特に技能面に不安を感じる教師にとって、音楽そのもののよさに気づき、楽器の操作にこだわらない授業展開が期待できる。楽器の数が不足する環境下では、唱歌で歌いながら弾きまねをして、楽器の順番が回ってきたら実際に触って確認することを繰り返すような工夫もあってよい。箏をはじめとする伝統音楽に主体的に関わることのできる取り組みが今後も望まれる。

付記

本稿は、日本音楽教育学会第 52 回京都大会（2021 年 10 月 16 日）で行った口頭発表の内容を基に、加筆修正し、発展させたものである。

注

- 1) 我が国の伝統音楽に関する授業実践や研究授業の報告は枚挙にいとまがないため、ここで詳細に述べることはしないが、近年筆者が関わったものとして、広島県教育委員会が行う教科等の専門性の一層の向上を図ることを目的とした教職員研修（エキスパート研修）において、高等学校で和太鼓の指導に取り組んだ実践（藤原康行（2018）「我が国の伝統音楽の指導法に関する研究—和太鼓を中心に—」平成 29 年度エキスパート研修受講者論文）や、中学校で口唱歌を用いて伝統音楽学習の指導計画に取り組んだ実践（小川大輔（2021）「我が国の伝統的な音楽に親しみ、よさを味わう授業づくり—口唱歌を取り入れた系統的な指導計画作りを目指して—」令和 2 年度エキスパート研修受講者論文）がある。
- 2) 教科書出版社（教育芸術社、教育出版）からは、デジタル教材として学習者用デジタルコンテンツが提供されている。教育芸術社は授業支援コンテンツとして YouTube チャンネル「教育芸術社」（<https://www.youtube.com/@kyogei>）で「箏を弾こう」と題したシリーズの動画を配信しており、箏の基礎知識や各種奏法の詳細かつ丁寧な実演・解説を視聴することができる。また学習支援コンテンツのページからは、日本芸術文化振興会と文化庁が制作した動画（国立劇場「和楽器の魅力—箏・三味線・太

鼓・笛・尺八」)を閲覧することができ、古典作品の演奏と演奏者のインタビューを視聴することができる (<https://textbook.kyogei.co.jp/library/wagakkinomiryoku>)。教育出版も YouTube チャンネル「教育出版音楽ライブラリ」(<https://www.youtube.com/@user-is9oo1yh5t>)で「日本の音楽に挑戦!」と題して、箏、常磐津、三味線、篠笛、長唄の各ジャンルの基礎知識、奏法、模範演奏の動画を配信している。

3) 箏に関するものでは、例えば次のようなものがある。

- ・尾藤弥生 (2015)『中学生に学ばせたい! これからの箏の授業』(DVD・テキスト・補助教材), ジャパンライム
- ・音楽鑑賞振興財団 (2016)『DVD ブック事例集 1 実践しよう! 鑑賞の授業「春の海」「六段の調」』音楽鑑賞振興財団
- ・日本三曲協会 (2017)『箏・三絃・尺八の指導 音楽教師のためのテキスト (DVD 付)』
- ・長谷川慎 (監修) (2017)『ヤマハデジタル音楽教材 箏授業 (DVD-ROM 付)』ヤマハミュージックエンタテイメントホールディングス
- ・日本音楽の教育と研究をつなぐ会 (2019)『[音楽指導ブック] 唱歌で学ぶ日本音楽 (DVD 付)』音楽之友社

引用文献

- 伊藤真 (2021)「音楽芸術へのふるまいと教室空間における『学び続ける主体』の接点」『学校教育』No.1250, 広島大学附属小学校 学校教育研究会, pp.6-13
- 伊藤真・平山裕基 (2017)「教員養成課程における箏の演習の効果と課題」『音楽文化教育学研究紀要』XXIX, 広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学講座, pp.23-30
- 大井絃・伊藤真 (2017)「音楽科教員養成課程における我が国の伝統音楽の扱い」中国四国教育学会 (編)『教育学研究紀要 (CD-ROM 版)』第 62 巻, pp.600-605
- 小塩さとみ・大学みき子 (2019)「教員養成大学における和楽器の指導に関する一考察—専門科目「和楽器」における箏と自主授業における三味線の取り組み—」『宮城教育大学紀要』第 54 巻, pp.215-230
- 尾見敦子 (2021)「日本の伝統音楽への興味と理解に及ぼす唱歌の役割—コロナ禍の大学のオンライン授業を通して—」『川村学園女子大学研究紀要』第 32 巻第 1 号, pp.97-116
- 斎藤完 & リンデル グンナル (2015)「ヨーロッパにおける日本音楽の受容—尺八の受容史ならびに 2014 年プラハ尺八フェスティバルの事例報告—」『山口大学教育学部研究論叢 (第 3 部)』第 64 巻, pp.107-115
- 寺内直子 (2015)「越境する雅楽—海外の大学カリキュラムにおける日本伝統音楽—」『国際文化学研究』第 44 巻, pp.1-28